

現代文学における「地域」と「開発」をめぐる系譜  
学的研究

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学 公開日: 2019-05-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渡邊, 英理 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10297/00026549">http://hdl.handle.net/10297/00026549</a>

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 20 日現在

機関番号：13801

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26870514

研究課題名(和文)現代文学における「地域」と「開発」をめぐる系譜学的研究

研究課題名(英文)The study of the representations of "region" and "development" in Japanese contemporary literature.

研究代表者

渡邊 英理 (Watanabe, Eri)

静岡大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号：50633567

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：東日本大震災および原発事故を受け「地域」と「開発」のあり方が問い直されている。本研究は、こうした今日のかつ喫緊の課題を文学研究において引き受け、「地域」と「開発」をめぐる系譜学的考察を行うものである。近代以来の都市/農村、都会/田舎、中央/地方など「地域」をめぐる構造的な関係や、帝国主義/植民地主義から(ポスト)冷戦体制への連続性をもった移行の中で生じる「地域」の偏差や変化等に留意しながら、中上健次、干刈あがた、崎山多美らの文学における「地域」と「開発」の表象を考察し、「開発文学」の一史脈を提示した。

研究成果の概要(英文)：After the Great East Japan Earthquake and nuclear accident, the problem of "regional development" is being reconsidered. I have pursued this important subject in Japanese contemporary literature research, and considered the representations of "region" and "development" archaeologically. With a focus on urban and rural structures, and the central and the periphery in modern times, along with the differences and changes that have occurred in the transition from imperialism/colonialism to the Cold War regime, I have presented part of the historical context of the representations of "region" and "development" in three authors' literature, Kenji Nakagami, Agata Hikari, and Tami Sakiyama.

研究分野：日本近現代文学

キーワード：日本文学 中上健次 地域 開発 崎山多美 干刈あがた

## 1. 研究開始当初の背景

東日本大震災と原発事故以後、戦後日本の「地域」の「開発」が再考されている。開沼博の「フクシマ論」、吉見俊哉の「原子力」をめぐる文化研究などに、その現在形が提出され、ダム建設／電力開発研究の町村敬志、水保／公害研究の原田正純、宇井純、栗原彬らによって、そのエッセンスは蓄積されてきた。また若林幹夫は社会学から、原武史は政治思想史から、それぞれ郊外の「開発」を追究している。

文学研究において、東日本大震災と原発事故のインパクトは、主に核の表象、「原爆文学」／「原発文学」という問題系で引き受けられ展開されている。木村朗子の震災後文学論、川村湊、陣野俊史、川口隆行、村上陽子らの「原爆文学」／「原発文学」研究などが、その中心である。

しかしながら、「地域」と「開発」の表象、すなわち「開発文学」という枠組みにおける研究は、十分な展開には至っていない。「開発」の主題は、前田愛の都市論的アプローチでの文学研究や、川村三郎、小田光雄らの「郊外文学」研究のなかに一部含まれるにとどまり、また「開発」の表象分析は、上記郊外研究で触れた小田の研究と、高度経済成長期の「都市開発」と日野啓三文学の考察を行う佐藤泉の研究などに断片的に散見されるのみである。

こうした状況を踏まえ、「開発文学」という問題設定を行い、文学言語に蓄積された「地域」と「開発」の表象をある一定の層として掘り起こし、それを歴史的・思想的に考察する必要性を感じ、本研究を構想した。

## 2. 研究の目的

これまで社会科学の領域で「地域」と「開発」の諸相が明らかにされてきた。それらの知見を踏まえながら、「開発文学」という問題設定を行い、「地域」と「開発」の表象を系譜学的に考察することが、本研究の目的である。

社会科学の領域で、戦後日本の「開発」研究の大きな磁場のひとつが、郊外であったことと相即し、従来、「開発文学」の研究は、「郊外」という空間を中心に展開されてきた。また、小田光雄らの研究など、わずかな例をのぞき、「開発」の過程そのものを文学表象で考察するという試みも行われていない。本研究では、従来、中心的に取り上げられてきた「郊外」という所与の

空間以外の多様な「開発」の場を問題化し、これまで十分に注目されてこなかったプロセスとしての「開発」の表象にも焦点をあてる。

そのための分析の中心におかれるのが、中上健次(1946-1992)の文学である。

中上は、自身の故郷・和歌山県新宮市の被差別部落をもとに路地という時空間を仮構し、その路地/被差別部落を舞台に多くの小説を書いている。また被差別部落が同和行政事業で「開発」されていく過程は「路地解体」と名指され、その空間の変容が小説中に表象されている。本研究では、その表象を、被差別部落という固有の文脈を持つ場所における「開発」の表象として捉えるとともに、「非農村」「地域」の「開発」、紀州・熊野の中核地域である「地方都市」の「開発」をめぐる表象としても位置づけて検討を行う。その表象分析を通じて、戦後の「地域」と「開発」をめぐる文学の一系譜を提示したい。

また、その系譜を比較対照研究によって多角化することも進める。

まず「地域」と「開発」をめぐる構造的な関係(都市/農村、都会/田舎、中央/地方)を輻輳的に描き出す視座を設ける。この点で分析対象となるのが、干刈あがた(1943-1992)の文学である。都市近郊や都心部の「開発」や「再開発」を描く作家・干刈あがた(1943-1992)の文学を分析し、中上文学と比較対照する。

次に帝国主義/植民地主義から(ポスト)冷戦体制へ、連続性をもった移行の中で生じる「地域」の偏差や変化に着目した視座を設ける。この点では、沖縄の「基地の街」の「開発」を描く崎山多美(1954-)の文学と、戦前の植民地からの「引揚者」など多様な移動者の視点を含む干刈の文学を考察する。以上の複眼的な考察から、戦後「地域開発」の表象の一系譜を提示する。

## 3. 研究の方法

(1)、系譜学的な研究の遂行のために関連資料の収集と分析を行った。主な分析対象となる文学テキストの一次資料、二次資料の収集と分析、文学に描かれた「地域」の「開発」をめぐる一次資料、二次資料の収集と分析、当該地域に赴いての現地調査などを実施した。文献資料の収集は、おもに宮崎公立大学図書館、静岡大学図書館、新宮市立図書館、中上健次資料室、国会図書館、熊野市立図書

館、御浜町立図書館、鹿児島県立図書館、鹿児島市立図書館などで行なった。

(2)、「開発文学」を展開する理論的基礎づけを、共同研究員として参加した国際日本文化研究センター（日文研）共同プロジェクト「戦後文化再考」のなかで国際的・学際的に深化させた。また、同プロジェクトの「高度経済成長期」の企画パネルで、「開発文学」研究を「戦後文化」のなかに位置付けて発表し、討議した。

(3)、開発という出来事や、それへの反応と深く関連する「公共性」の思想に関して、中国やアメリカの研究者とも連携し、継続的に共同作業と議論を行なった。

#### 4. 研究成果

この研究の重要な成果のひとつは、戦後生まれで初の芥川賞作家で、和歌山県新宮市の被差別部落出身の作家である中上健次の文学を、人の移動と「地域」の「開発」を描く戦後文学として位置付けなおした点にある。すなわち、農村／地方から都市へ移動した人々を描く「都市小説」と、その移動と関連的な関係にある地域の開発を、自身の故郷、和歌山県新宮市の被差別部落の路地を舞台に描き出す「開発文学」との性格において中上文学を捉え直した。

次に、「開発」の表象をめぐる具体的な分析を通して、その運動性の一端を解明した点である。土地や風景の具体的な改変をとともなう「開発」という出来事に際し、文学言語は、風景や土地、その改変や喪失過程とを記録し、記憶する装置となる。その装置における「開発」の表象は、大衆的かつ私的であり、匿名的であり個人的であり、無意識や欲望によっても構築されている。本研究では、こうした文学表象の両義性・多義性に着目し、日文研の「戦後文化再考」のプロジェクトに参画しながら、「開発」表象に現れる歴史認識や思想性を解明した。

第三としては、また上記考察を通じて、「開発」表象の輻輳的な系譜の一部を描き出したことがあげられる。

上記の考察のなかで、同時代作家で詩人・思想家の谷川雁、中上没後に活躍するファンタジー作家の上橋菜穂子など、従来、中上文学と十分に結びつけられてこなかった文学テキストとの相互関連性を指摘することができた。

また、こうした新しい間テキスト性という成果は、中上文学と干刈あがたの文学という比較対照の視座においても示されている。中上と干刈は、ほぼ同時代作家でありながら、戦後の地方都市と都心部近郊というその主な小説空間や小説スタイルの対照性ゆえに、従来、両者を同じ俎上に並べ、その文学の共通性や差異を検討することはされてこなかった。本研究では、「開発」の表象という共通項の分析において、子供や空き地という隙間空間、遊びという行為を通じた「公共性」の思想という両者の共通性と、ジェンダー的な差異とを解明した。

一方、資本と国家（行政）による「開発」を前景化する中上・干刈の文学に対して、崎山の文学は、「戦争」と「占領」による沖縄の「開発」を描きだしている。中上・干刈と、その後代作家である崎山多美の文学の比較対照からは、「本土」という空間、さらには「戦後」という時間を相対化する視座を獲得できた。この点はまた、冷戦期から（ポスト）冷戦期のアジアとアメリカのなかで「開発文学」を考えるという、次の研究課題の着想へとつながった。

以上の考察から、本研究では「開発文学」の一系譜を描出した。現在、これらの成果の一部を単著として公刊することを計画している。そこでは、中上文学を軸に、成長の時代からポスト成長の時代への移行期における「開発」の表象が分析され、それが示す記憶と思想性のあり方を示している。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計7件）

①渡邊英理 「路地なき後の世界の現代性を示す——中上紀『天狗の回路』」 『図書新聞』 査読無し、2017年、8頁。

[https://www1.e-hon.ne.jp/content/tosho-shimbun/3320\\_3.html](https://www1.e-hon.ne.jp/content/tosho-shimbun/3320_3.html)

②渡邊英理 「戦争と開発——干刈あがた『予習時間』をめぐって」 『社会文学』、査読無し、45号、特集：日本とアメリカ 2016年、91-95頁。

③渡邊英理 「媒介する言葉と路地の夢」 『翻訳の文化／文化の翻訳』 静岡大学人文社会科学部翻訳文化研究会、査読無し、第11号、2015年、1-20頁。

④渡邊英理 「地域開発の思想文学／記録

文学」『地域研究』静岡大学人文社会科学部 査読無し、第7号、2016年、45-53頁。

⑤渡邊英理 「谷川雁と中上健次」上 『西日本新聞』査読無し、2015年5月26日、11頁。

⑥渡邊英理 「谷川雁と中上健次」下 『西日本新聞』査読無し、2015年5月27日、8頁。

⑦渡邊英理 「現代文学の中の『古事記』——谷川雁・中上健次・上橋菜穂子」 『宮崎県文化講座研究紀要』査読無し、第41輯、2015年3月、17-34頁。

⑧渡邊英理 「由沖縄展開の东亚像——从崎山多美の文学说起」 『区域』清華大学人文社会科学高等研究所編社会科学文献出版社、査読無し、2014年、vol.3 2014年、320-329頁。

〔学会発表〕(計6件)

①渡邊英理 「現代文学と古事記——中上健次・谷川雁・上橋菜穂子」 新宮市立図書館 2018年。

②「中上健次と「アメリカ、アメリカ」」(作家中上紀氏と対談) 2017熊野大学夏期セミナー「南方熊楠と中上健次を探る」 2017年。

③渡邊英理 「宮崎の沖縄奄美タウン、波島と公共性」 日本国際文化学会第16回全国大会シンポジウム「<1940年>を起点に考える<2020年>の越え方」(招待講演) 2017年。

④渡邊英理 「中上健次とアメリカ」、アン・マクナイト、Lectures On Kenji Nakagami、アイオワ大学International Writing Program(IWP)50周年記念「A Half Century Of Japanese Writers in Iowa」(招待講演) 2017年。

⑤渡邊英理 「暴力と公共性——中上健次、路地の思想文学」 岩崎稔 パネル「暴力、記憶、公共性——高度経済成長期の思想文化」(特集：高度経済成長期) 大学共同利用機関法人人間文化研究機構、国際日本文化研究センター(日文研)共同プロジェクト「戦後文化再考」(代表 坪井秀人日文研教授) 2016年。

⑥渡邊英理 「世界文学の中で考える——女性文学者が読む中上健次」 熊野大学 2016 夏季特別セミナー「中上健次生後70年、次世代へ」 2016年。

⑦渡邊英理 「路地の文学思想——中上健次『熊野集』「海神」 日本近代文学会九州支部 2014 年春季大会 2014年。

〔図書〕(計2件)

①渡邊英理 「月報」 「谷川雁と中上健次」 中上健次、堀江敏幸、高澤英次、野谷文昭、紀和鏡 『中上健次集三』インスクリプト社 2015年、2-9頁。

②渡邊英理 「沖縄から開くアジア像——崎山多美の文学から」 岩崎稔・成田龍一・島村輝 編 『アジアの記憶と戦争』 勉誠出版、2018年、87-112頁。

〔産業財産権〕

○出願状況(計 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況(計 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

渡邊 英理 (WATANABE, Eri)

静岡大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号：50633567

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：

### (4) 研究協力者

( )